

# 第 10 回釧路港舟漕ぎ記念大会を終えて

釧路港舟漕ぎ大会実行委員会



## 1. はじめに

早いものである。「釧路港舟漕ぎ大会」も 10 回目を迎えた。第 1 回から 10 年が過ぎたことになる。昔は 10 年一昔と言って 10 年前の事は遠い過去の話しになったが、日本人の寿命が延びたことにより時間の感覚が違ったものとなって、第 1 回大会が昨日のように感じられる。

この 10 回の節目に何故、今舟漕ぎ大会かというその目的・目標から遡って見たいと思う、第 1 回の舟漕ぎ大会終了した平成 17 年 11 月に、今は故人となられた「NPO 法人北海道みなとの文化振興機構」当時の理事長田中敦幸さんが招集した舟漕ぎ全道大会の取組についての会議が開かれた。道内 5 港（紋別港、十勝港、石狩湾新港、苫小牧港、釧路港）の管理者が出席した。

この会議の主旨は、平成 17 年 8 月 6 日に第 1 回釧路港の舟漕ぎ大会実施した結果を踏まえ、今後実施港を増やして、ゆくゆくは全道大会開催をするというための取組についての集まりであった。釧路大会からの実施後の問題・課題について報告を受けた後、故田中理事長は港祭りの現状と港を利用したイベントの必要性を自分の苫小牧港開発(株)時代、フェリー岸壁を利用して行った「港ふれあいフェスティバル」の体験から今後、全道舟漕ぎ大会を目指して取組という力強い言葉で閉められた。

今、この会議の議事録を改めて見て、ここに 10 回大会の報告と全道大会の取組経過とその結果についての継続的改善 PDCA を行ってみよう。

## 2. 第 10 回釧路港舟漕ぎ記念大会

今回の 10 回大会は、節目の大会という位置付けで半年前から準備委員会を設置して検討してきた。

結果、1) 国際色豊かにするため、台湾・韓国チームの参加、さらに管外チームについての参加呼びかけ。2) 全道大会の準備としての位置付けから全道舟漕ぎ実施港の参加勧誘。3) 前夜祭の充実、賞金アップ。4) 参加チームの検討。が課題として取り組むこととした。これらの検討した結果、6 月の総会に案が出された。

第 10 回大会は記念大会という優勝賞金は 50 万円(普通 20 万円)、その他に市内の各企業よりの副賞、さらに募集参加チームは試合数が時間割の関係 (1 試合 5 隻) で 30 試合が限度で最大 90 チーム(一般 65 チーム、女性 25 チーム) とした。

以上の要領で募集の結果、台湾・韓国も参加することが決定し、従来より参加している KCM 中国・ベトナムチームの参加により国際色が豊かになった。応募チームは一般 68 チーム、女性 23 チームの計 91 チーム(補欠 1 チーム)。その他の応募チームは東京からの参加チーム、一方、根室・室蘭の舟漕ぎ大会からの参加、そのほか思いもよらない北大のよさこいチーム(赤フン) 緑が男女チームの参加と従来の異色チーム、平均年令 73.8 才の船員 OB チーム、漁師の兄弟舟チーム、その他病院、振興局、開発局、市役所、銀行、海上保安部等々、90 チームの内訳は職種別に分けた下表のとおりである。

官庁関係	20 チーム	友達・仲間	13 チーム
政治団体	6 チーム	学校関係	7 チーム
病院関係	2 チーム	海外チーム	4 チーム
漁業関係	5 チーム	他港チーム	2 チーム
会社関係	18 チーム	その他団体	13 チーム



以上の参加メンバーで 8 月 2 日(土) 8 時からの開会式は会長挨拶後、来賓者 19 人もいるため、代表挨拶は市長と地元代議士に各々 2 分という時間制限で受けた後、8 時 25 分から第 1 試合は、会長と来賓者 17 人によるピストルの号令とともに開始した。当日は、舟漕ぎにとって命とも言える天気は、これ以上は望めないという晴天に恵まれた。



この大会にとって名物となった女性アナウンサーの名調子の司会で快調に進み、予選一般14レース、女性5レース、一般敗者復活戦2レース、準決勝女性2レース、一般4レースが13時30分までに終了し、その後下位5チームによる決定戦(下位決定戦一般1レース、女性1レース)で笑いをとり、何とも言っても決勝戦は、女性優勝賞金25万円、一般優勝賞金50万円は、真剣勝負となる。決勝はまず女性から行うが、出場チームは1隻ずつ両岸の観客に対して顔見せを兼ねて一周し、その間に応援団が競技者紹介をする。今回の女性チームは三連覇中のチームが、競技者が集まらなく欠場したため本命が不在で混沌して、どのチームが優勝しても不思議でないという状況で、過去3連覇したこともある漕ぎまくり隊が折り返し後追い込みで優勝した。



一般の決勝は、大本命は昨年の優勝チームの第15富丸チーム、毎回決勝には残るが優勝できない釧路製作所燦々会チーム、昨年から参加のアイスホッケーチーム日本製紙クレインズチーム、毎回決勝に残るようになった海上保安部J&H1チーム、今回初めて決勝に残った漁組キングサーモンズチームという顔ぶれであった。さすがに50万円を手に入れるのにあと一歩のところまで来た各チームは真剣そのものであった。

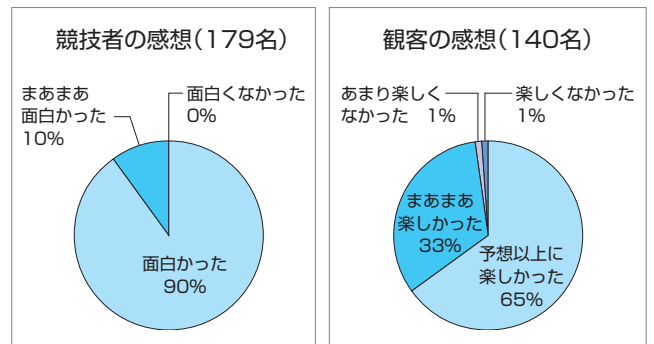
スタートの静寂を破る号砲一発で各艇一斉漕ぎ出し、折り返し地点までは差がなく、折り返し地点では第15富丸が僅かに早かったが、ほとんど同時、後半第15富丸に疲れが見えた時点でJ&H1が追い込んで優勝をさらった格好となった。以下、燦々会、キングサーモンズ、日本製紙クレインズという結果で終わった。

この緊張感、面白さの醍醐味は紙面での紹介では隔靴搔痒の感がある。是非一度見ていただきたい。

その後、閉会式・表彰式を行い終了した。



第10回大会は、出場チームが過去最多に伴い、観客も大幅に増えた。この結果、顧客満足度も観客98% (昨年86%)、競技者100% (昨年84%)と非常に高い支持を得た。



### 3. 全道大会開催へのもう一つの取組の試案

現在、舟漕ぎ大会が行われているのは、調査漏れもあると思うが、根室港(根室港舟漕ぎレース)、釧路港(釧路港舟漕ぎ大会)、江差港(全道北前船競漕大会)、白尻漁港(舟漕ぎ競争)、網走湖(北海道ドラゴンボート競技大会)、ラウネ川(舟漕ぎ大会 in ラウネ川)、稚内港(稚内副港ボートレース)、函館港(函館ペリーボート競漕)、苫小牧港(はすかつぽボートレース)、室蘭港(むろらん港鉄人舟漕ぎ大会)、鹿部漁港(カッター競漕大会)の11港であり、今後も増え続けるはずである。

全道大会開催の今までの取組は、舟漕ぎ大会実施の勧誘を行ってきた。すなわち、ボトムアップ方式を採ってきた。この方法で行えばどうしても地方のオリジナルを加えるところが多く、ルールの一統ができなかった。



この原因は、故田中理事長が構想した全道大会開催を最終的目標とするという理念が欠落して、地方実施そのものが目標になった為だと考えられる。これを解決する為には、トップダウン方式を採用。すなわち、デモンストレーションを兼ねて小樽港か、石狩湾新港で全道大会開催をして、そのルールを今後の実施港に波及させる方法が良いのではないか。

若し、某新聞の札幌・小樽の地方版に、〇月〇日、全道舟漕ぎ大会参加者募集、練習は茨戸湖で〇〇日～〇〇日、この大会予選勝者と、根室、釧路、室蘭、(稚内?)の各地区代表との決勝戦を行うと掲載して実施する。

このデモンストレーションを通してルールが同じ舟漕ぎ実施港を普及させる。そのことから前述の試案を考えてみた。

この札幌・小樽での大会は、準備と相当なボランティアの人員が必要となるが、釧路で舟漕ぎ大会を立ち上げたノウハウと港湾関係者の協力があれば不可能でない。しかし、懸念されるのは我々に、その情熱とエネルギーが残されているにかかっている。



#### 4. あとがき

釧路港舟漕ぎ大会は、継続的改善 PDCA を行い改

善し、1 ヶ月前から練習日を設けて盛り上げ、祭りの宵宮としての前夜祭、本祭りの舟漕ぎ大会、後夜祭として写真コンテスト・展示会、舟漕ぎ大会の約6時間のイベントを練習含め1 ヶ月というイベントへ成長させた。ゆくゆくは、釧路川・春採湖の練習を1つの風物詩にすることを考えている。また、故田中理事長に約束した全道大会開催については、今までの報告のとおりで釧路についてはよくやったと及第点はとれると思われるが、残念ながら全道への普及について、後任のNPO理事長と取り組んだが、その後、函館、苫小牧、稚内、室蘭と輪は広がったが、室蘭以外はルールを統一できなかった。これは我々の努力不足ということになる。

来年の釧路の第11回大会は、宴の後の大会で賞金も元に戻すため、その分楽しくするための別の味付け・工夫が求められてくる。そのためには、第10回大会の競技者(179名)・観客(140名)のアンケートが参考になる。その結果の顧客満足度は先述したとおりである。

なお、観客については、別途意見を記入式では意見を聴取しづらいということで、インタビュー方式で舟漕ぎ大会の感想・大会に対する意見を71名からアンケートを実施した。

この71名の釧路港舟漕ぎ大会に対する観客の感想は、釧路のイベントとして素晴らしい、迫力がある。また初めて見た人は何故もっと早く来なかったのか等々。継続性についても各国・全国・全道からの参加で全道大会を開催して欲しい。港・河・魚の街のイベントとして大賛成、このことが街の活性化になり地域に貢献するから続けて欲しい等々、実行委員会事務局として胸が熱くなる意見が多かった。

なお、参加チームからの意見は大会関係者に対する感謝の意見が50%を超え、改善に対する意見も多く、今後第11回大会の参考にしたいと思っている。

今後は本大会への市民の熱い想いを実現するため、釧路の地域活性化は勿論のこと、北海道の短い夏を謳歌するための海のイベント、全道舟漕ぎ大会開催し、故田中理事長の思いに報いたいと思っている。

